

環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	30
俳誌交歓	31
12月号月評	32
恵贈句集拝見(81)	34
恵贈俳誌拝見(47)	36
特別作品「小さき手」	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
別冊100号 会員自選句鑑賞(2)	46
イザナミの言語学(12)	48
環本部句会報(11)	50
烏原吟行	52
琵琶湖俳句サロン	54
エッセイ「満月」	55

今月の一句

翁塚石路咲く中に水映り

桂 樟蹊子

(昭和二年作)

冬の日、義仲寺の芭蕉の句碑にお参りをされた。墓の前の小池に芭蕉の墓碑と石路の花が美しく水面に映っていた。浄土のあの世の姿を映しているようで、その姿に思わず手を合わせたとの注釈がある。空の碧い日の午後であった。

隆 子

秋深き

塩路隆子

牛声のくぐもる但馬霧深き

山麓の牛舎をよぎる雁の声

爽涼の風吹き抜くる藩主の間
(甘棠亭)

実柘榴と庭井の景や書院窓

燭の焦げ残る厠戸秋深き
(青谿書院)

聖人の坐像秋暑の塵被く

妙見にただよふ靈気秋寂びて

十二月号光耀抄

塩路 隆子選

平城山に鳶の滑空柿赤し
日溜りの石に瞑想秋の蝶
大江山の鬼の戸隠す霧襖
棉を摘む河内木綿のゆかりの地
おだやかな敬老の日や鳩が鳴き
臨書する筆走りけり秋の夜半
城壁を登りきりたる秋気かな
秋の寺語尾の流るる加賀ことば
使者ならむ朝一番の雁の声
産卵日記す地卵秋うらら
ならまちを守る庚申秋暑き
秋分の阿弥陀や慈悲を垂れ給ふ
萩の散る橋桁あらは流れ橋
木洩日の秋光集め研屋かな
雲龍図の天井迫る秋澄めり
脳細胞の覚めゆく心地秋深し
紅を濃く掛声凜と輿担ぐ
駅に待つ独りの客へ鉦叩
葉の先にそつと触れたり龍田姫

笠井 清佑
藤見佳楠子
伊東 和子
伊藤 純子
杉本 綾
飯田美千子
片岡久美子
辻 知代子
川崎 利子
森下 康子
竹内 悦子
山口キミコ
山本 孝夫
粟倉 昌子
石川かおり
大島みよし
桂 敦子
北尾 章郎
木戸 宏子

残る虫なれど正調貫きて
 宗像の神南備の座や秋揚羽
 句歴より病歴長し鱗雲
 まほろばの原風景や柿たわわ
 パラグライダーの渡る影濃し秋の嶺
 廬山寺の門重し月明り
 赤富士の金色となる午前五時
 白鷺の百を数ふる刈田かな
 さし迫ることもなき日や大根蒔く
 嵩ばれる衣桁や後の更衣
 豊穰の峽たそがれて鹿の声
 妻籠へと導くさまに彼岸花
 鷺草の群れて咲くなりカフエの窓
 峽住の縁側広し望の月
 伊吹より豊の秋なる米どころ
 虫の闇仄と大河のシルエツト
 吾が胸に触るるもの皆秋の声
 鷹匠の鋭きまなこ秋高し
 月光を浴びて新たな街となる
 秋海棠紅の色増す雨雫

国包 澄子
 坂上 香菜
 阪本 哲弘
 塩路 五郎
 鈴木 照子
 坂根 宏子
 中井 弘一
 中川 すみ子
 中村 ふく子
 中本 吉信
 橋本 靖子
 福本 すみ子
 増田 一代
 松岡 和子
 三川 美代子
 宮田 香
 田中 浅子
 宮崎 左智子
 難波 篤直
 伊庭 玲子

青白く母乳流るる汀女の忌
 蛇笏忌や瘦せたることを笑はるる
 談笑のまん中にあり次郎柿
 絶景の秋の浜辺を五能線
 下つ枝に翹たたみけり秋の蝶
 子守女のおなじ鄙唄草紅葉
 讚美歌のバージンロード秋光に
 まどろめば囁くやうに萩の花
 公開の終活講座秋愁ふ
 鱗雲みづうみ渉る山の鐘
 道中着に太夫の息吹秋座敷
 十六夜の雨ほとほと戸を叩く
 息弾ませ天空の城萩垂るる
 ざくろの実夕日の中で笑ひけり
 柿眺むる父の雄弁若き日々
 病みてより酒絶ちて知る夜長かな
 風あらば手を振るやうに花芒
 乃木神社の棗大樹や薄もみぢ
 文人の集ふ角屋の夜長かな
 駅ひとつ歩く決心紅葉晴

常田 希望
 常田 創
 松田 洋子
 井口 淳子
 大松 一枝
 西郷 慶子
 山崎 里美
 辻 香秀
 鷺見 たえ子
 小西 和子
 松田 和子
 伊藤 和子
 岩梶 隆子
 岩佐 ヨシエ
 大堀 賢二
 大越 義雄
 山下 潤子
 山田 愛子
 渡部 法子
 伊藤 憲子

案山子の着る学生服の金釦
 冷まじや鴉の声の風を切る
 実山椒夕暮れ早き峡の空
 花終わり修羅場跡めく曼珠沙華
 我儘を論す父母無し吾亦紅
 いろどりの園の見どころ葉鶏頭
 体育祭激走に立つ砂煙
 屯する鴉の静か寒露なる
 昇りゆく湯釜の硫気秋の声
 秋刀魚焼き家族の揃ふ夕餉かな
 日の丸に父の名のあり雁の声
 安曇野はくまなく晴れて秋桜
 天空ににらみ雲龍秋日和
 新走り丹波小鼓酌み交はす
 衣ほどく糸のもつれや草紅葉
 諸蔓を炊きて戦時を思ひけり
 国宝の堂の一扉へ秋の風
 雲海のすき間の下界秋の町
 海に向く狸地藏や曼珠沙華

黒住 康晴
 小林 久子
 笹井 康夫
 佐用 圭子
 杉田 福
 高谷 栄一
 高屋喜美子
 谷口 俊郎
 津田 富司
 土井久美子
 十時 和子
 中井登喜子
 西垣 順子
 西田 史郎
 西村 敏子
 能勢 栄子
 秦 和子
 藤本 秀機
 森田 利和

琥珀集

秋の蝶

藤見佳楠子

満月やをさなに聞かすかぐや姫
夜の長き口にまろげせ飴一つ
箒目の渦のひろごり薄紅葉
日溜りの石に瞑想秋の蝶
賜猛る門固き勅使門
童田姫山より里へ紅をさす
幾年を驥のままに秋裕

翁舞

笠井 清佑

霧襖

伊東 和子

品格を問へる人あり貴船菊
白鳳の石仏白し秋の雨（笠井重太郎飯石井寺句）
石仏に紅幽かなり秋時雨
背後には皆既月蝕翁舞
静かなり秘むる香りの藤袴
靱殻に埋もれ紅玉届きけり
平城山に鳶の滑空柿赤し

早稲の香のふる里近し峠越え
丹波路へひと日芒の風の中
大江山の鬼の戸隠す霧襖
秋祭り待ち侘ぶる母癒え兆す
水音の轟き那智の秋気澄む
那智大社の高みに鳴ける秋の蝉
文献に義父のルーツや虫の声

棉

草の花隠れ耶蘇てふ村遠し
クルス山崩せる道路冷まじき
身に入むや墓碑のクルスの彫うすき
茶店まで届く稲の香棚田村
棉吹くや休耕田の空広し
棉を摘む河内木綿のゆかりの地
綿繰りの体験学習莫塵の上

伊藤純子

大徳寺

新薫の香り並ぶや三角垂
秋光に映ゆる唐門大徳寺
庭園の近江八景秋うらら（大徳寺・孤蓬庵句）
吹き抜けの書院茶室や秋の風
臨書する筆走りけり秋の夜半
頬染むる天体ショーの月赤き
刻一刻蝕甚もどる夜半の秋

飯田美千子

野萱草

百円を筒に落して茄子を買ふ
山風に葉をひるがへす萩の花
菜園の畦のあたりの野萱草
寂しさに顔あげて見る秋の雲
おだやかな敬老の日や鳩が鳴き
推敲し原句に戻る夜長かな
秋蟬のこゑいづくにか山晴るる

杉本綾

吉備の里

吉備伝説の深山うそ寒鬼の城
白萩のうねりの阻む砦みち
城塞を登りきりたる秋気かな
復元の古代山城秋澄めり
蓮は実には城址公園風渡る
落城の武将の塚や彼岸花
武士の名を塚に残すや稲穂波

片岡久美子

色なき風

辻 知代子

秋の寺語尾の流るる加賀ことば
秋の暑を夜に持ち込める平屋建
廃屋の崩れたる屋根うそ寒し
もてなしの秋の水打つ石畳
島原の色なき風や蜜議部屋
手拍子に高鳴るジャズや秋の宵
爽籟や百念仏の念珠繰り

雁の声

川崎 利子

棗食む栗鼠の母子の心地して
使者ならむ朝一番の雁の声
木の実成る藪は光を透かせつつ
ぐづる兎に持たせるスマホ秋うらら
物忘れは友も同じやそぞろ寒
虫の音に酔うて夜更けのとろろ蕎麦
仕舞風呂に心身委ね台風禍

初冠雪

森下 康子

産卵日記す地卵秋うらら
秋の日や鳴らぬ電話を待ち暮るる
初冠雪の富士一段と美うつくしかり
ざぶとんと言ふ部位の肉うそ寒し
雨の音しつとり聞ける秋思かな
骨密度の低下の膝やそぞろ寒
軒下をちよつと借ります秋時雨

星月夜

竹内 悦子

もてなしのホテルの庭の花野かな
新米を旨しといふ子大人びて
唐突に婚の花火や星月夜
秋澄みて琵琶湖大橋五十年
ならまちを守る庚申秋暑き
鶴鴿がついておいでと嬰を誘ふ
窮すれば南無と唱ふる秋思かな

琵琶湖ホテル

鳳凰堂

山口キミコ

秋光

栗倉 昌子

秋彼岸鳳凰堂の弥陀の印

鳳凰の輝くみ寺秋の空

秋澄みて三の間の景際立てり

実むらさきの連なる館ミュージアム

時めくや源氏館の秋の草

秋分の阿弥陀や慈悲を垂れ給ふ

天高し朱塗り新たに鳳凰堂

爽やかやリフォーム了ふる終の家

怠け癖けふを限りと檸檬切る

残る蚊にさされたる痕きずとなり

木洩日の秋光集め研屋かな

水切りの石迂りゆく秋の川

名水の秋澄む音を掬ひけり

弾きたる後の間合や胡麻を炒る

盆の客

山本 孝夫

妙心寺五句

石川かおり

盆の客送るバス停荷の重し

萩の散る橋桁あらは流れ橋

羽やはし低きに群るる赤とんぼ

半袖に風知る季節彼岸花

小都市の父兄の多き運動会

秋風や喧騒他所に住吉社 (島原句)

天高し槐双樹に迎へられ

秋晴るる十万坪の妙心寺

初秋や水琴窟に耳すませ

雲龍図の天井迫る秋澄めり

飛石に木洩日ゆらぎ鴉の声

塔頭へ続く白壁薄紅葉

溪紅葉にかはらけひとつ迷ひ込む

踏まれゆく银杏の実に風匂ふ

曼珠沙華

大島みよし

追憶の余白を埋める曼珠沙華
 脳細胞の覚めゆく心地秋深し
 秋天をひとり占めせる展望台
 「ありがたう」と五字の碑いしづみ秋深し
 深秋やいまあることを神に謝し
 捨て難き物捨つる日や秋愁ひ
 秋深し地球病巣深くなり

彼岸花

桂 敦子

新涼やテニス快拳の報に湧き
 紅を濃く掛声凜と輿担ぐ(八朔祭・女御輿)
 夜想曲シヨパン聴きあふる月の宵
 他人事となほ思ひたし敬老日
 野辺に咲く秋草自然体に活け
 露草の宿せる雫青かりき
 咲く刻をしかと心得彼岸花

鉦 叩

北尾 章郎

プラスアルファ名庭園の昼の虫
 秋茄子の存在感や一の膳
 紅葉山わきたる不運活火山
 なつかしき故郷の訛り墓詣
 駅に待つ独りの客へ鉦叩
 めがね屋の検査室より窓の秋
 貫緑の鹿の眼光る神の域

秋日和

木戸 宏子

緞帳に海老描かれて秋芝居
 手入れよき松に色なき風渡る
 葉の先にそつと触れたり龍田姫うみやま
 湖山の日本画めける秋の暁
 秋空へ国旗はためき児らの声
 赤白の萩咲き溢れ尼の寺
 空青し声を限りの残り蟬

瑠璃集

月

曼珠沙華今を盛りと天上花
月光を浴びて新たな街となる
秋風と共に客増す平等院
金色の鳳凰照らし月昇る
月清し流れ煌めく宇治の川

難波 篤直

満月

吾が胸に触るるもの皆秋の声
満月の明り吸ひ込む暈の目
赤蜻蛉群れて落暉に溶け込める
夢二展の大正ロマン芙蓉咲く
をちこちに声する墓所や秋彼岸

田中 浅子

秋海棠

戒名を覚えぬままに秋彼岸
稲刈日の天気予報を立話
秋海棠紅の色増す雨傘
港町夜の霧笛を真近にし
布表紙の本読む人や秋関くる

伊庭 玲子

彼岸花

鷹匠の鋭きまなこ秋高し
彼岸花連帯責任負ふつもり
亡き夫の遺品の帽子赤い羽根
櫛の実千本鳥居くぐり落つ
祀ること無き虚しさの十三夜

宮崎左智子

汀女の忌

青白く母乳流るる汀女の忌
長き夜の授乳しだいに覚めにけり
稲刈の真中一筋残し昼
秋の灯の一つに電話ボックスも
秋時雨言葉以前の怒りかな

常田 希望

十二月月号月評

塩路 隆子

平城山に鶯の滑空柿赤し

笠井 清佑

平城山は平城京の北側に横たわる丘陵である。北見志保子作詞、平井康三郎作曲「人恋うは悲しきものと平城山にもとほり来つつ堪えがたかりき」の歌は、古墳時代の故事にちなんだ作詞者の「人を恋い慕う気持ちのどうにもならない悲しさは、平城山辺りを廻り歩いていると耐えがたかった」と恋する自分の気持ちを表現している。その平城山の歌の連想から「鶯の滑空」「柿赤し」の措辞が空しく読者の胸にひびく。幽玄の境地に立つての句に惹かれた。

日溜りの石に瞑想秋の蝶

藤見佳楠子

眼の手術で休まれていた作者の復活の句である。秋の陽光が少し恋しくなった秋の日溜りにある飛び石であろうか庭石であろうか、秋の蝶が動かずじっと羽を広げてとまっている。それを「秋の蝶」が「瞑想」をしていると捉えられた。それが発見であり、それが詩である。良い句に仕立て上げられた。

棉を摘む河内木綿のゆかりの地

伊藤 純子

大阪府の東部に広がる河内平野は大和川の下流で湿地のために農作物に適せず開発がおくられていたが、江戸時代には棉を作るようになり諸国に出荷され、河内の全耕地の60パーセント余りが棉の栽培地となった。河内木綿は普通より生地が厚く、女帯の芯や足袋の裏、又は暖簾や、油単などで有名である。いまもその名残で棉を作っている農家があり、綿繰り機の体験会などに参加された句である。珍しい素材をうまく詠み込まれ、大いに郷愁をそそられた一句であった。

おだやかな敬老の日や鳩が鳴き

杉本 綾

山科の山里で夜になると狸や鹿や猿が出てくる自然の中にお住まいの作者である。敬老の日が穏やかに明け、おだやかに暮れて行く様子が窺われるのは下五の「鳩が鳴く」の措辞に充分に表現されている。優しい言葉でもって、こころの奥深いところをさりとってのける、それが俳句の真骨頂であると信じている筆者にとつては、見逃せない一句であった。鳩は平和の象徴であり、何事もなく穏やかに暮れた「敬老の日」、鳩の声を聞いて過ごした作者は、「感謝」の一語であったに違いない。下五「鳩が鳴く」がうまく心情を捉えている。(以下略)